ことがひとつひっかかりまして、どうも大変です。それで最後まで李瑞環という中央の偉い人がいたんですが、その人にいつも手紙を書いていた。一応は平反と言いまして、文革の時に罪に落とされたのはもう許してもらってるんですけど、依然として面白くないということで、しょっちゅう手紙を出してたということを息子が言ってます。

息子は52歳で、私は長春に行きますといつも世話になってるんです。迎えに来たりなんかして。その息子の息子が、去年北京の武警大学といって武装警察の大学に入学する時に、親父は「お前絶対に警察になるな。公安に入ったら駄目だ」。まあ入ったら駄目じゃなくて、共産党のいわゆる政治的な活動をするなということを盛んに言われて、共産党の大学じゃなくて武装警察、いわゆる警察とちょっと系統が違うらしいんですね、中国の場合。そちらのほうへ行ったということを言ってます。だからやっぱり他にもたくさんありますけど、だいたい文革の時には目を付けられた人が多いです。われわれの同窓生もたくさんいて、親日家の人が多いですけど、それでも未だに建国大学のことを言う場合は、慎重に物事をはこんでいる。

数十人が当時のことを回想した文章を翻訳した、こんなに厚い文集があるんですが、それを見ますと、やっぱり彼らは日本の侵略（建国大学を作った…）についてはものすごく批判してるんです。八紘一宇とか民族協和とか、そういう言葉について。ところが下の者同士、学生同士の平素からの共同生活の中で生まれてくる絆については非常に高く評価してます。従って戦後すぐ向こうの同窓といろいろ交流したりしまして、私も全部で子女の数は５人なんですけど、同窓３人の保証をして日本に留学させ、今日本で働いています。その他いろんな交流が進んでおります。従ってやっぱり国際的な学校を１つ作って、日本人の同窓だけじゃなく向こうの人も一緒になっていろいろやっていけば、これからの愛知大学も非常に将来発展して、アジアの大学としてふさわしい、良い学校ができるんじゃないかと思いまして、今提案を申し上げました。

【司会】 はい、ありがとうございました。それでは最後５番目の園部先生であります。園部先生は台湾の台北高校のご出身です。その後四高へ行かれましたけれども、創設期の愛知大学にお父様が教授として赴任されまして、そのお父様と共に愛知大学の学内で生活をされたという、非常にこれも貴重なご経験かと思います。今回この催しの中で、ぜひ私も参加したいということを髙井さんのほうに強く申し入れられたということでありまして、嬉しい限りであります。そういうわけでまた貴重な視点からお話がいただけるかと思います。ひとつよろしくお願いいたします。

【園部】 園部です。よろしくどうぞ。今日のコメンテーターの髙井先生は、私は西新橋の法律事務所に机を置いてるんですけど、すぐ近くの霞が関のビルに住んでおられまして、近いものですから一度この会と似たようなことを髙井先生の事務所の近くで催したことがあるんですけれども、そこまではお引き受けしたんですが、そしたらついでにこっちも来いということでございます。私は前の４人の方と違って原稿もろくに用意しておりませんで、やっつけ本番で、しかも学会のような報告ではなくて、漫談でございますのでいくらでも伸縮自在で、時間になれば終えますので、よろしくどうぞ。

私は愛知大学も、愛知大学の予科も卒業しておりませんで申し訳ないのですが。今日のお話の角度は、つまり戦前の植民地ないし満州国・中国の高等教育がどうであったか、あるいはその後の、戦後の状況はどうであったか、という観点からお話ししたいと思っています。私の父は引き揚げ後、東京の明治大学に奉職しておりましたけど、何しろ戦争直後のことで住むところが無く、台湾から

引き揚げる時は1人行李1つと千円ずつしか持って帰られなかったものですから内地に恒産もなく、仮住まい、仮住まいを続けてるうちに、もう東京で住むところが無くなってしまって、これはいけない、何とかしなければと思っていたところ、愛知大学のほうからお呼びがかかりまして、とにかく住むところがあるからやってこいという話です。

先ほど見つけたのですが、畔柳武司さんという名城大学理工学部の先生の「日本近代建築史における愛知大学の建物」という論文、これが実に面白い。ミニアチュアを作っておられまして、愛知大学内現存遺構というのがあったんです。少なくともこの先生がミニアチュアを作った時にはあったんですが、明治41年に建てられた古い古い、まあ兵舎ですね。兵舎ですけどそれを改造しまして教職員宿舎にしたんです。これを覚えておられる方は……愛知大学に前におられた方、平成6年に取り壊されたものですから、平成6年まではあったのです。私も1度だけまいりまして、ああここに住んでたなあと確かめたのですが。これはその後短大の4号館というのになりまして、私がまいりました時は何かサークル活動の展示がしてあった。そうしましたらミニアチュアの中で特にこの兵舎を取り出して、また別に作って展示してありました。大変懐かしい建物でございまして、だいたい上に2家族、下に2家族住んでおりました。

旧制の第四高等学校というのが金沢にございまして、私はそこで正確には2年半過ごし、帰省の度にこの愛知大学の教職員住宅に戻って、愛知大学の中で生活をしていたわけでございます。それで愛知大学同窓会設立55周年記念誌というのに、私と同じ昭和4年生まれ（私は昭和4年の早生まれです）の井上という方が東亜同文書院大学から来て、何か父ともいろいろ関係があったらしいですが、その思い出に「開校当時キャンパスラインや教職員用住宅と、付近にそれぞれ約30坪ぐらいの菜園があり、先生も慣れない手付きで鍬を持ち、芋畑を耕しておられた」と書いてあります。私も帰省する度に手伝わされまして、ここにも書いてあるんですが「肥桶を担い人糞の肥料をやり」という、ここが大変なんです。ご経験ある方あるかと思いますが、肥担桶を天秤で担いでこぼさないように歩くというのは大変なことでございまして、相当バランス感覚と腰が強くないと。肥担桶にはいっぱい入るんです、あれがまた。ですからちょっと下手な動かし方をすると飛び出てくるものですから、フーフー言って、これは「人糞」と書いてありますけども昔は「金糞」と言った。金糞をやり、収穫したゴンギ、私の時は野菜でしたけど、野菜を家計の足しにしたという記憶がございます。今はもうそこが短大のサークルの立派な建物になっておりまして、菜園ももちろんございませんし、建物も無くなっております。

そういうわけで私と愛知大学の関係というのは、こういったことの関係なんでどうも申し訳ないんですけど。父は3年ぐらいいたんですかね、ですから昔の先生の名前は覚えてて、小岩井先生、四方先生、森谷先生と、いくらでも出てきます。そういう意味では大変懐かしいところでございます。今日はそういうわけで私と愛知大学の関係と言うよりも、殊に戦前から戦後にかけての日本の高等教育の状態、あるいはまあ昔はどうであったかということを、私の経験と体験によってお話ししたいと思っております。

私は昭和4年に当時の朝鮮（今の韓国）の京城（今のソウル）で生まれて育ちました。父もそういうふうで育ったんですが、それは私の祖父が明治30年頃に岐阜で裁判所書記（当時は書記と言っておりました。今は書記官と言います）をしておりまして、そのうちに韓国併合（明治43年）となりました。先ほどもお話がありましたけれど、当時韓国は立派な独立国でございまして、もちろん学校の制度もあれば、裁判官を養成する法院（今だいたい中国系では裁判官は法官、裁判所は

法院と言います）の法官養成所などというものがあったんですけども、そこへ日本が行って全く日本的に治めることになった。最初のうちは韓国の人達も日本語がしゃべれるわけでなし、日本人も韓国語がしゃべれるわけじゃない。そうするとやっぱり裁判所側でも、日本語がしゃべれる裁判官や書記官が行っていろいろやらなきゃいけないということになって、私の祖父は明治時代に韓国に移住したわけでございます。

その時に子供が男４人、女１人生まれまして、私の父は長男です。二男は先ほどのお話にあった京城高等工業（高等商業もありました）を出ました。三男は東京高等師範という、これは今はありませんが、教育大学になりましけども、昔は師範学校というのがございました。師範学校は中学レベルで、小学校の先生を特に養成する。高等師範は中学・高校。これは専門学校レベルで、卒業生は中学校の先生になる。広島から東京からあっちこっち高等師範というのはございました。東京に高等師範がありまして、私の３番目の叔父はそこに行っておりました。４番目は、京城中学、京城帝国大学予科、京城帝国大学医学部に入りました。そして卒業して医師になったんですが、肺を患って、引き揚げて間もなく亡くなってしまいました。これだけ４人の男の子を抱えていて、女の子を１人抱えていて、大変なんですね、やっぱり、当時としては。書記官の給料でどこまでやれたか分かりませんが、まあご承知のように植民地へまいりますと、先ほどのお話では軍人は２階級上がる、それから一般の官吏はかなり特別な手当てが付くわけでございました。そういうことで家庭の事情などもあって、韓国や台湾に皆移り住んだということもあるんです。

今はもうそういう場所が無いし、昔はもっとその他に移民などもあって、日本からたくさんの移民が南米とかもちろんアメリカにも行ったんですけど、まあアメリカでずいぶん戦争中ひどい目に遭ったのはそういう人達です。ですから日本はこの狭い狭い国土で、何とか経済的に発展していきたいと思うとやはり外国に土地を求め、住むところを求めず、働くところを求めると、これはまあ植民地というのはイギリスもフランスもドイツも、みんなそうでございますね。先進国はそういう植民地を持つことでお互いに肩を並べようという気持ちは充分あったのですから、明治以来の日本の政策というのはやっぱり相当植民地政策に力を入れたわけなんです。

私の父は東大の法学部を出ましたが、その前は五高と言って第五高等学校（熊本）に行っておりました。昔の専門学校というのは、まず高等学校がナンバースクールと言って１から８まで。１が東京、２が仙台、３が京都、４が金沢、５が熊本、６が岡山、７が鹿児島（造士館）、８が名古屋です。その他に富山高校とか水戸高校とか、そういう地名の付いた高等学校がございました。この官立の地名スクールが約18校ありました。その他に帝国大学予科というのがありまして、これが北海道大学、京城帝国大学、台北帝国大学とあったわけです。それから官公私立の７年制の高等学校というのがありました。尋常科４年生、高等科３年生で７年間、小学校を出てからずっとその高等学校まで行けるという、これが官公私立含めて９校ございました。一番最後の高等学校はさっきもお話ししたんですが、だいたい旅順高校ということになってたんですけど、その他に医専を中心としてできあがったやはり高等学校が７校ございます。

まあいろいろあったんですけども、それが全部戦前にできたものばかりでございます。戦後はおそらくこの旧制の高等学校とか大学予科というのは廃止されるのではないかという動きもあったということで、戦後新しく作るということはもちろん致しませんでしたが、その中で愛知大学予科だけ、戦後に３年制の予科を作った。そういう意味で非常にユニークなんです。だから人によっては、愛知大学予科のことを忘れてると言うか知らない

人もいて、愛知大学だけ予科３年と大学４年を作った、旧制の場合は大学３年を作ったというのは、非常に画期的なことであります。

私の父は五高（熊本）ですから割合と京城（ソウル）から行く人がいたと思うんですが、五高では佐藤栄作と全く同じクラスでございまして、昔は高等学校は独法か英法か仏法かという具合に分かれている。文科甲類乙類、それから理科甲類乙類。文科の甲は英語、乙はドイツ語、丙はフランス語。理科の甲類はだいだい理工系に行く人、乙類はドイツ語が中心で医学部に行く人が入ってきたわけなんですね。ナンバースクールなどではほとんどフリーパスで帝国大学に行けた。ご承知のように夏目漱石の頃は帝国大学というのは東京しかなかったので、帝大と言うと東大のことだったんですが、京大ができてから東京帝大と言うようになる。帝大に入るということが割合と楽に、まあ東大の場合は試験がございましたけど。最初は東大予備門なんて申しておりまして、当然帝国大学に入れるという状態でございました。

戦後アメリカがどういうわけか、急に日本の学制を変えようということになりまして、こういう状態になったわけなんです。私自身のことをあと２分で申し上げますと、私は京城師範付属第一小学校に２年までおりました。祖父は55歳で隠居するものですから、それからは長男の父が１人で全部、弟や妹の面倒を見なきゃならない。これは大変だったと思いますけどね。それで東大を出てから京城法学専門学校の教授になりました。先ほど経済専門学校というのがあって、これは高商のあとですけど、法学専門学校の前身は当時の韓国の法官養成学校でした。韓国人の数が多くて、韓国の人達に法学教育をして全国の裁判所や弁護士に散らばらせるというようなことでございます。京城法学専門学校の同僚に木村常信という先生がいて、これがフランス語の大家だったんですけど、後に京大の教養部の先生になって、あまり難しい法学入門の講義をするものだから法学部に入るのを嫌がった学生がいたと言います。この木村常信の長男は北大の名誉教授をしてる政治学者ですけど、姉さんは有名な山村美紗なんですね。まあそういう形でつながっています。

最後にもう１つだけ。私は台北の第一師範学校附属小学校２年生に転校し、卒業しました。台北第一中学校を卒業（当時は４年で卒業）すると、旧制の高等学校が台北にございます。どういうわけか、ソウル（京城）には旧制の高等学校はなくて大学予科だけある。台北には旧制の高等学校と台北帝大の予科がございます。台北の高等学校に私は理科乙類と言って今の医学進学課程に入ったんです。なぜかと言うと父親が、文科に入るとすぐ兵隊に取られるから理科に行けと希望するもんですから、あまり好きじゃなかったんですけど理科乙類に入りました。そうしたら理科も文科も全部兵隊に取られちゃって、私は16歳で台北の北の山の中で、アメリカ軍の上陸を待つ陸軍二等兵。蛸壺を掘って、アメリカの戦車が上がってきたらそれにボールの先に火薬を付けたものでドーンとぶつかって行けと。ぶつかって行って戦車がやられたら自分は蛸壺に戻れと言う。そんなことできっこないので、これは陸の特攻隊でございました。

最後に結びですけど、要するにそこでもしずっと兵隊をやってたら、私はあきらかにこんなところでお話をしていないのでございまして、アメリカ軍の上陸する沖縄と同じ状態になっておりましたところ、まあどういうわけか台湾に上陸したらあそこには高砂族という首狩り族がいると。あれに首切られて死ぬのは困るということを言ったとか言わないとか。それでアメリカ軍は申し訳ないけど沖縄に直接上陸しちゃった。沖縄ではだいたい16歳の中学生、女学生、みんなああやってひどい目に遭って殺されたわけでございます。私も16歳の陸軍二等兵で、もしそのままアメリカ軍が上陸してきたら命は無かっただろうと思います。そういう非常に難しい状況の下で、旧制の高

等学校を途中で引き揚げてまいりました。金沢に第四高等学校というのがございまして、ここは京城帝国大学の鳥山喜一という教授が校長をしており、外地からの引き揚げの高等学校、予科、陸軍士官学校、海軍兵学校等々の人達をかなり受け入れてくれたんです。ですから私の四高の友達、同じクラスには建国大学の人もハルピン学院の人もいる。旅順高校も確かいましたかね、そういう人達が入ってきました。戦後の日本の高等教育というのはそういう状態であって、その典型的なものが愛知大学です。愛知大学は大学を作って予科まで作ったわけですから、これはもう日本独特の高等教育を戦後展開されたということになったと思います。

時間も制限されておりますので、とりあえずここで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

【司会】 はい、どうもありがとうございました。何かご質問ございますでしょうか。

【平田】 今お話を伺いまして、京城帝国大学には予科はあったけども旧制高校が無かったわけですよね。台湾には台北帝国大学の予科と台北高校と、２つあったようなお話を伺いましたが、その時には志願者のほうとしてはどちらへ行くのか。高校へ行けば大学は自由に選べる、予科へ行けばその大学へしか行けないということですか。北大も確かそうだったと思うんですが。

【園部】 そうです。もともと京城帝大と台北帝大を作った時は、学生をどうやって集めるかということがありますから、京城帝大の場合もまず予科を作って、予科にどんどん来てもらってそれから大学へ行くと、そういうやり方ですね。それで高等学校を何で作らなかったかと言うと、私の父もそうだったのですけど、要するに韓国と日本とは地理的に近いですから、高等学校を作らなくてもだいたい内地の高等学校にみんな来るわけです。台北の場合は、最初高等学校しか無くて、予科は無かったんです。どうしてかと言うとだいたい船で３日近くかかりますから、高等学校を作っておけばその台北高等学校を卒業したら台北帝大にだいぶ来てくれるだろうという期待があったんですね。ところが、台北高等学校を卒業した人のほとんどが内地の大学に来るもんだから、台北帝大に入る人が非常に少なくて、やむを得ずあとで台北帝大の予科を作ったと、そういう実状がございました。

【平田】 ありがとうございます。

【司会】 どうもありがとうございました。それでは以上で５人の先生方のお話を終わらせていただきます。予定した時間を少しオーバー気味ではありますけれど、ほぼ順調に進んでいると思います。そこで今から約15分ほど休憩を取り、16時10分あたりから後半の部へ移らせていただきたいと思います。なおトイレは後ろのほうにございますし、１階ではいろいろ展示物等を販売しております。その辺りでご休憩いただければありがたく思います。一応前半の部はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

時間がちょっと過ぎてしまって申し訳ありませんけど、後半の部へ入らせていただきます。後半はぜひ会場フロアの方々からのご意見等も、いろいろ出していただければ大変ありがたいと思います。その前に今度の企画を中心的に進めていただいた愛知大学同窓会東京支部長の髙井先生のほうから、今回の企画に到った背景を含めて、５人の発表者の方々のご発表を聞いた上でのコメントをお願いできたらというふうに思います。さっそくお願いします。

【髙井】 髙井和伸でございます。今日に到った経緯についてはあとで言うことにして、忘れないでおきたいことを先に言いたいと思います。園部先生は財団法人台湾協会の会長をなさっておられます。李登輝さんは台湾高校の先輩であって、そう